

げんでん ふれあい 福井

2015 WINTER 第48号

第34回 近畿高等学校総合文化祭

ちいきのぶんかかつどう ～財団助成事業の紹介～

ふるさと福井 人物シリーズ「高濱虚子の小説『虹』のヒロイン 森田 愛子」

音楽をすること

文／今川 裕代

筆者プロフィール

今川 裕代
Hiroyo Imagawa

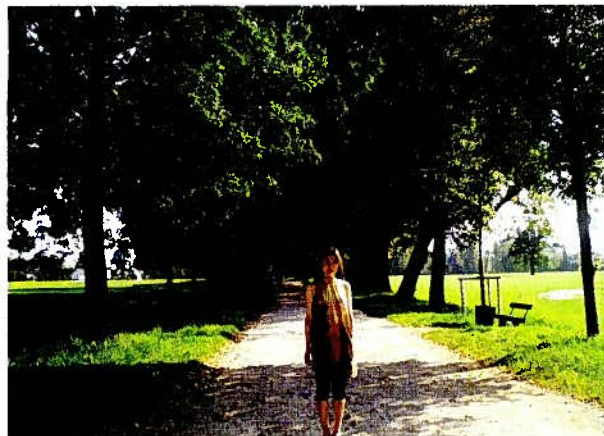
ピアニスト。シュトゥットガルト国立音楽大学及びザルツブルク・モーツァルテウム国立音楽大学修士課程首席卒業。サレルノ国際ピアノコンクール第1位、シュペルト国際ピアノコンクール第2位、ブラームス国際音楽コンクール第2位など受賞多数。英国王室宮殿内での御前演奏やヨーロッパ各地の音楽祭に出演するなど、国内外で幅広く活動。多彩な音色と繊細な叙情性、洗練された音楽性が高く評価されている。福井県出身。

ドイツに留学して20年が経つ。成田空港に見送りに来た家族や親戚と別れ、一人飛行機に乗り、希望と不安で涙をいっばいためながら、必ず良いピアニストになろうと心に誓ったこと……この思いは今も全く変わらない。無我夢中でピアノと共に生きてきたが、ようやく今、音楽との向き合い方が変わってきた。

ドイツ語には *musizieren* (ムジツィレン) という言葉がある。直訳すると「音楽をする」という意味になるが、楽器を弾くとか歌を歌うこととは別の意味を持っていて、音楽的な中身、つまり心が伴った行為を指している。

クラシック音楽の場合、

偉大な作曲家が遺した作品を演奏するには、様々な観点からの勉強や膨大な練習が必要だ。演奏家は神聖な作品と真摯に向き合い、音符の背後にあるメッセージを伝えられるよう、日々研鑽に励んでいるが、励めば励むほど、理想は高くなり、自己嫌悪に陥り、耳ばかり肥えていく。音楽は字の通り楽しむものとわかっていても、練習の段階では、音学になり、音我苦になってしまう。学生の頃は、巨匠



今川裕代さん（ザルツブルクにて）

の枯れた演奏や、自由奔放で情熱的な演奏に憧れ、自分の性格を変えなければ演奏も変わらないと思った。それでも、大好きな音楽の魅力をお客様に伝えたいと、持てる技術と愛情を注ぎ、精一杯頑張ってきた。

あるとき、ショパンのマズルカを弾いていると、弾くという行為を忘れて、自分の思いや感情を自由自在に音へ投影していた。思い返せば、本当にムジツィレンしていたときは、複雑な曲であっても、弾いているという感覚はなく、その作品の宇宙に包まれながら、素直に語り、淡々と伝えている。実はそんな時こそ、作品のエッセンスだけが浮かび上がり、音楽が人の心の奥深くに届くのだと思う。そこには、もっと特別な演奏をしたいとか、良い自分を見せたいという欲や虚栄心はない。音楽をするということとは、体の脱力だけでなく、心の脱力も必要なのだ。

30歳になったとき、ある音楽関係者から言われた言葉がある。その人の音楽性が最も変わるのは、女性30代、男性は40代の10年間であり、この10年が勝負ですよ、と。長らく忘れていた言葉だが、最近になってその言葉の意味をようやく体感できるようになってきた。音楽は生き物だ。楽しみも苦しみもすべての経験が音に染み込み、時の経過と共に変化し、味わいが出てくる。時間をかけてしみ出てくるものを大切にしたい。

表紙の説明

毎年5月5日、福井市味見河内(旧美山町)の住吉神社で行われる柴で葺いた神輿をかつぐ、原初的な神輿の起源を思わせる春祭り。「じじぐれ」とはふだん聞き慣れない名称ですが、またの名は「青山祭り」「かあか祭り」「椿祭り」「にんにく祭り」「千代千代祭り」とも。部子山を望む上比丘尼地籍の「神の森」から住吉三神を迎えるに際して神輿がなかったのが、ブナやシデで葺いた急ごしらえの柴神輿で神を勧請したという故事に基づくとされています。



財団シンボルマーク



公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

目次 48

- 巻頭エッセイ
「音楽をすること」…………… 2
- 第34回近畿高等学校総合文化祭…………… 3
- ちいきのぶんかかつどう
～財団助成事業の紹介～…………… 4～5
- ふるさと福井人物シリーズ
「高濱虚子の小説「虹」のヒロイン
森田 愛子」…………… 6～7
- ふくい伝統行事シリーズ
「じじぐれ祭り」…………… 8
- 若狭の食彩(三)
「麴の食文化」…………… 9
- 敦賀市立博物館
誌上ギャラリー／42…………… 10
- 情報ファイル…………… 11

第34回 近畿高等学校総合文化祭

掘りだそう！育もう！若き文化のたまごたち

第34回近畿高等学校総合文化祭が11月7日から16日まで、県内4市の11会場で開催されました。テーマは「掘りだそう！育もう！若き文化のたまごたち」。近畿2府8県から音楽、美術、演劇など16部門に約5千人の高校生が参加し、日ごろの成果を披露、熱い感動の中に交流、研究を深めました。

総合開会式

総合開会式は、11月8日に福井県立音楽堂ハーモニーホールふくい大ホールで開催されました。

第1部の式典では、ハーブアンサンブルのオープニング、生徒実行委員会



各府県代表の入場

による開会宣言の後、各府県の代表が入場し、各府県の魅力などを紹介。開催県を代表して生徒実行委員長の浅井美樹さん（北陸高3年）が「近畿各地から集まった仲間と共に素敵な時間や感動を共有しながら、一人ひとりが秘めている若い力を見つけ出し、磨き合いたい、大きな力に育てる最高の舞台にしましょう。」とあいさつしました。

第2部のデモンストレーションでは、本県生徒約400人が参加して、「福井記憶博物館へようこそ」と題し、太古から現在までの福井と近畿圏との深いつながりを演劇で紐解きながら、和太鼓演奏、合唱、剣詩舞、ダンス、弦楽合奏などで表現しました。若さいっぱいの迫力ある演技に感動です。

マーチングバンド・バントワリング部門

マーチングバンド・バントワリング部門の発表が、11月16日、敦賀市総合運動公園体育館で行われました。8府県から12の高校が参加、本県からは、マーチングバンドに敦賀高校、仁愛女子高校が、バントワリングに福井工業大学附属福井高校、福井商業高校が参加し、華麗でスピード感あふれる演奏・演技を披露しました。



福井工業大学附属福井高校のバントワリング
「紅月～ブラッドムーン」



敦賀高校のマーチングバンド
「Leave it all to Shine」



仁愛女子高校のマーチングバンド
「水面に射す紅き影の波紋」



福井商業高校のバントワリング
「Dream JETS!」

ちいきのぶんかつどう

財団助成事業の紹介

当財団では毎年、県内の文化団体等の事業活動に助成を行っています。今年度の助成事業の中から3つの事業を紹介します。

長畝日向神楽伝承館 改修事業



増設された長畝日向神楽伝承館

や文献等の資料を新たに展示、長畝日向神楽をわかりやすく解説しています。伝承館は入場無料、予約が必要です。

【連絡先】 0776-66-3658

山田 正行さん

はるけくも 代々に伝えて現代もなほ日向の神楽わが町に舞ふ

去る9月20日、21日、長畝八幡神社秋季例大祭で世の安泰と五穀豊穡を願って伝統の舞を奉納、併せて伝承館の展示室も公開され、大勢の参拝者が厳粛な伝統芸能に見入っていました。

坂井市丸岡町の長畝日向神楽保存会（会長山田正行さん）は、福井県無形民俗文化財「日向神楽」を紹介する伝承館展示室を増設し、展示資料を充実しました。

保存会は区内の有志会員で構成され、丸岡藩の時代から伝わる伝統の日向神楽を後世に伝えるため、後継者の育成など伝承活動に取り組んでいます。

広く県民にも知ってもらうと、平成21年に伝承館を整備、神楽面や衣装など300点余りの貴重な資料等を展示公開しています。今回は日向神楽の歴史、奉納場所等の解説パネルや、神楽のモチーフである天の岩戸神話の絵図



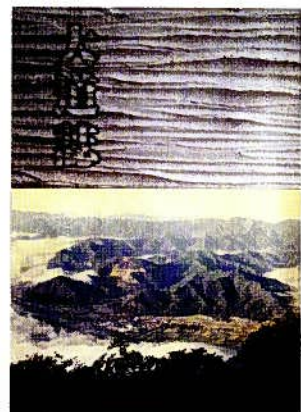
長畝日向神楽

〈長畝日向神楽とは〉

1695年（元禄8年）、日向国（今の宮崎県）延岡城主であった有馬清純が丸岡城主に移封された際、日向神楽の舞手を同伴し丸岡に伝わった。以来明治維新まで、丸岡藩お抱え神楽として城内城下7社で奉納された。明治4年の廃藩置県により神楽の伝承が困難になったが、明治15年に長畝村の有志が神楽講を組織し、衣装、面、小道具などを引き継ぎ、長畝八幡神社に継承、今日に至っている。

毎年、長畝八幡神社秋季例大祭で奉納されており、1日目（夜の神楽）は、天照大神が岩戸に閉じこもってから外に連れ出すまでを、2日目（昼の神楽）は、天照大神とともに光が戻った喜びを表した神楽が舞われる。全部で24番の舞があるが、現在は16番の舞を継承している。

「大道誌」編纂事業



大道誌

南越前町の東大道区と西大道区は、郷土の歴史を取りまとめた「大道誌」を8月に発刊しました。

平成22年に両区で大道誌編纂委員会（委員長 中村節夫さん）を組織、毎月、例会を開催し、資料や写真の収集、原稿の執筆、編集等に取り組み、5年がかりで完成しました。

交通網、公共施設、農業・商工業、災害、神社・仏閣、伝承・民俗などの分野ごとに、地域の歴史を資料や写真とともに紹介しています。

500部を作成、両区の各世帯や図書館等の関係機関に贈りました。

子孫に我々は何を残すか、語り継ぐとされている内容の底に流れているものは、先人の築いてこられた、生活の知恵と苦勞の積み重ねであります。その上に現在の私達が存在することを決して忘れないでほしいというメッセージであります。（編纂委員加藤滋和さんの「あとがき」から）

編纂委員は団塊の世代がほとんど。

先人の足跡を後世に伝えたい、ふるさとに対する強い思いの結晶です。両区の発展につながる大変有意義な事業となりました。

東大道という所

JR南条駅の付近一帯が大道であるが、ここは大変不思議なところである。駅前を往昔から北陸道が南北に貫通しており、多数の著名人や旅人が往来したところである。私達住民は、南隣の関ヶ鼻から北隣の脇本までおよそ一、六kmの長い道路の両側に軒を連ねて住んでいるのである。道路の東側を東大道、西側を西大道という。つまり集落の境は道路である。向こう三軒両隣と言われるが、向こう三軒は隣の集落の住民であり、両隣は同じ集落民である。氏神様は別々で、妙泰寺の檀家や他宗派の方が多数混在している。又、田畑は所有耕作ともに混在しているのである。日常の生活は何の支障も無く、何事もお互い様ですとして延々と続いてきたのであり、今後も続いてゆくであろう。(編集委員長中村節夫さんの「まえがき」から)



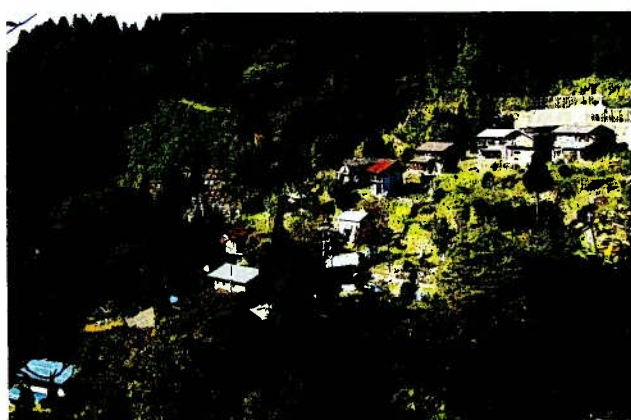
道路を挟んで左側が東大道、右側が西大道

みんなで守ろう！
未来へ残そう！小原の自然！
ミチノクフクジュソウ！

福井県絶滅危惧Ⅰ類に指定されているミチノクフクジュソウを守ろうと、勝山市の「小原ECOプロジェクト」(代表 國吉一寛さん)は、地域の住民や小学校の児童とともに保全活動に取り組んでいます。

勝山市北谷町小原地区。石川県との県境に位置する豪雪地帯にあり、かつては林業などを生業とする活気のある山里でしたが、林業の衰退や生活環境の厳しさから住民が減少、限界集落になりました。

昔ながらの里山の風景や、野生生物や希少植物が多く生息する「生き物たちの宝庫」を守っていくと平成18年に団体を結成、古民家の修復やミチノ



山にへばりつくようにある小原の集落



開花観察会の模様

クフクジュソウの保全活動などを行っています。4月15日には、市内の村岡小学校の児童たちが参加してミチノクフクジュソウの開花観察

会を開催、開花数の調査や保全啓発看板の設置などを行いました。7月から10月にかけては、ボランティアによる保全地区の草刈り作業を実施。地域の住民と小学校の児童が様々なボランティアとともに保全活動に取り組むことにより、地域資源や自然への関心、地域住民のつながりを強化しようとする取組みが大きくなってきました。

ミチノクフクジュソウ

キンポウゲ科の多年草でフクジュソウの一種。従来は日本に分布するフクジュソウ(福寿草)は



ミチノクフクジュソウ

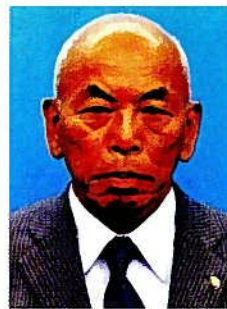
1種とされてきたが、最近になって、フクジュソウ(福寿草)、キタミフクジュソウ(北見福寿草)、ミチノクフクジュソウ(陸奥福寿草)、シコクフクジュソウ(四国福寿草)の4種に分類されるようになった。
本州(東北、関東、中部)と九州に分布。県内では勝山市北谷町周辺にだけ自生地がある。早春に黄色い花を咲かせ、まわりの山々の残雪に映えて美しい。土手や明るい林の下など明るい場所に生えるが、草が茂りすぎて暗くなると育たなくなる。根こそぎ採取されたり、杉植林の進行、耕作の放棄、雑木の成長等生育環境は悪化している。勝山市が天然記念物に指定している。

高濱虚子の小説「虹」のヒロイン

森田 愛子

文／山岸世詩明

筆者プロフィール



山岸 世詩明
(本名 義昭)

Yoshiaki Yamagishi

昭和15年生まれ。鯖江市在住。俳歴65年、伊藤柏翠に師事。ホトギス同人。現在、伊藤柏翠俳句記念館館長、鯖江市俳句連盟会長。福井県保護司連合会会長、福井県人権擁護委員会副会長、鯖江市農業委員会会長等の公職を多数歴任。平成18年福井県功労者知事表彰受賞。平成22年秋の叙勲で瑞宝双光章受章。

愛子の誕生と少女時代



父森田三郎右衛門と愛子
(伊藤柏翠俳句記念館提供)

愛子は、大正6年11月18日生まれ。三國の豪商、3代目森田三郎右衛門を父に、母は滝谷村芸者置屋、田中屋の娘、名妓よしで、18歳で三郎右衛門の側室となり、兄武雄、姉敏子がいたが夭逝した。森田家は中世より北前船交易で広域事業での財は揺るがなかったが、本家にも妻や兄弟がいたが何不自由なく可愛がられ、三國高等女学校を優秀な成績で卒業。その後、東京実践女子専門学校にも進むが中退。才色兼備で勝ち気だが決して驕らず明るくて良い性格が慕われていた。

鎌倉での俳句との出会い

20歳の春、彼女は肺湿潤と診断され、鎌倉に転地療養する。昭和14年人工気胸治療のため、鈴木療養所等で療養。高濱虚子の弟子、伊藤柏翠と劇的な出会いを経て俳句の道に入る。その後、虚子と出会い、虚子の娘、星野立子や松本たかしらとも交流し、才能を現す。

戦時中、物不足もあって昭和16年父のすすめで秋に三國へ戻る。昭和15年愛子23歳のとき、柏翠のすすめでホトトギスに投句し、5月号に初入選する。

化粧して病みこもりをり春の雪
(昭15) 愛子
続いて療養生活での状況を詠む。

病人の好きな小径の赤のまま
(昭15) 愛子



森田 愛子
鎌倉七里ヶ浜「鈴木療養所」散歩道で
昭和15年初秋撮影 (伊藤柏翠俳句記念館提供)

愛子の俳句は情愛が深く、自然を詠いながら自分や他人の景と情があり、周囲の人より認められると柏翠は語っている。

彼女が帰郷後、柏翠は年に何度か三國を訪れ、愛子の仲間や皆吉爽雨、嵯峨柚子らと交流した。仲間の勧めで昭和20年2月末に柏翠も三國へ疎開。永正寺に下宿したが、ほどなく愛子の家に身を寄せた。

或る日仲間の長谷川みつじが愛子を訪ねたら、俳句をつくりましようとのことで、雪吊の庭景色を見て作った句は、

雪除の外は月夜の人通り 愛子

又21年1月7日、三好達治が愛子を見舞った折り見せた惜春の俳句を三度も雑誌に書いている。

わが家の対岸にきて春惜しむ
(昭19) 愛子

虚子の小説「虹」のヒロイン

戦争で父を主とした森田家は大きく傾いた。柏翠は哀れな母娘のため、浅草の土地や家屋を処分して、三國に永住を決める。

昭和18年11月、虚子は旅の途中、愛子と母を山中温泉の旅に招待した。そのお礼に、柏翠と愛子が踊り母が唄った。その前後のことが、虚子の小説「虹」となった。以後「愛居」「小説は尚続きをり」「音楽は尚続きをり」「寿福寺」等にヒロインとして残っている。その後虚子は小諸に疎開中、虹を見たので愛子にハガキを書いた。それには三句を認めた。

浅間かけて虹のたたらる君知るや 虚子

虹だちて忽ち君の在る如し 虚子

虹消えて忽ち君の無き如し 虚子

昭和21年、29歳8月頃から病状が進み寝たきりとなる愛子に、虚子は三度目の見舞いで「虹」の原稿を読み聞かせる。虚子先生が「今度は貴方の為に来たのですから何でも我儘をいひなさい」とおっしゃった。愛子は「はい」と答えた。その時夕食をすることになり、勿体なくも「ではここで召上つて下さい。」と申上げてしまった。その後ここで句会をして欲しいことがわかって、その時、年尾先生が披露された中に、

あすよりは病忘れて菊枕 虚子

そのとき愛子はぎくりとした。快くならねばならないと思った。虚子は前の日も、お別れの日も「きつと快くなりませうかね」とおっしゃられ、私の阿弥陀さまは、虚子先生である。愛子はいくつわがまを言ったか数えた。そして大きな我儘を言うのを忘れていたのである。それは「今度いつ来て下さいますか、そして必ず」と言うことであると結んでいる。

愛子の最期とその後

昭和22年1月、愛子は玉藻同人となる。

3月28日電報を打つ

ニジキエテスデニナケレドアルコトシ

アイコ

3月30日

虹の上に立ちて見守るてふことも

(昭22) 愛子

虹の上に立てば小諸も鎌倉も

(昭22) 愛子

4月1日午後4時50分愛子死去、享年29歳と4ヶ月。葬儀は本家の長男、森田一郎がつとめる。その年の12月15日、父三郎右衛門も死去、68歳。
4月1日虚子より愛子におくる

虹の橋渡り交して相見舞 虚子

又、虚子は愛子の死去の報に接し

虹の橋渡り遊ぶも意のままに 虚子

昭和23年4月22日、虚子の許可をえて、柏翠が鎌倉の寿福寺に愛子の墓を建てる。その他森田本家の性海寺、柏翠のお大師さまのもとにとの計らいで高野山奥の院にも建つ。柏翠の計らいで三国の月窓寺の柏翠の墓の隣にも眠る。——森月妙愛大師——

その後柏翠は五人目の母なる、愛子の母よしと共に昭和24年7月17日料理旅館「虹屋」開業、9年目に廃業。柏翠と愛子の共著句集「虹」を発行。昭和52年3月母よし死去、享年88歳まで柏翠は妻子と愛子の母よしとともに生きる。

《高濱虚子小説

「虹物語」のヒロイン 内容説明

①「虹」

虚子の第一回三国来訪（昭和18年11月）。山中温泉より関西方面に向かう虚子一行を柏翠と愛子母娘が敦賀駅まで送る途中で、「虹」に気づいた虚子が「虹が立ってゐる」と指さすと、師と別れ難い気持ちの愛子が「虹の橋を渡って鎌倉に行こう」と感傷的になつてつぶやく。

②「愛居」

第二回虚子来訪（昭和20年11月）。愛子の懇願で小句会が催された部屋を「愛居」と命名、虚子自筆の額を掲げ、その時の経緯を描いています。



愛居の額 虚子の揮毫（伊藤柏翠俳句記念館提供）

③「音楽は尚ほ続きをり」

愛子ら小諸虚子庵訪問（昭和21年6月）と虚子の第三回目来訪（昭和21年11月）を描いたもの。

④「小説は尚ほ続きをり」

愛子の死後、柏翠と愛子の母が小諸の虚子庵を訪問（昭和22年6月頃）。生前の愛子に対する厚情を謝す。この時の様子が描かれている。

⑤「寿福寺」

愛子が亡くなった翌年の4月。虚子と柏翠によって鎌倉・寿福寺境内に建てられた愛子墓の建立経緯を描いたものです。

《森田愛子句集「虹帖」より

代表20句選抄（本文以外のもの）

紅梅の花一ぱいに葎ひらき	昭16
寿福寺の梅の盛りの實朝忌	〃
雪国の深き底や寝待月	〃
啄木鳥や山門までの杉襖	昭17
雪吊を作り来しは加賀の者	〃
雪吊の縄より縄へ四十雀	〃
空の瑠璃受けて生れて犬ぶぐり	〃
菜の花や二人漕ぎなる渦渡舟	〃
花びらのごと鱗散り櫻鯛	〃
豊田屋は我が家並びや哥川の忌	〃
塔頭にして尼寺や百日紅	〃
鎌倉の夢見て覺めて雪籠	昭18
後ずさりして鷗飛び雪しまき	昭19
父の居に来て湯に入りて年惜しむ	昭20
病みてより夜の粉雪の音が好き	昭21
海鼠腸が好きで勝気で病身で	昭22
美しき布團に病みて死ぬ氣なく	〃
雪卸してそれよりの仲違ひ	〃
虹の上に立てば小諸も鎌倉も	〃
虹消えてすでに無けれどある如し	〃

福井県無形民俗文化財

「じじぐれ祭り」

福井市

じじぐれ祭りの起源伝承

国道158号線的美濃街道から池田町へと足羽川沿いに右折し、さらに支流の上味見川を遡っていくと、谷あい
に別天地のような戸数24戸の味見河内
があります。当地は細々と焼き畑を営
み、特産の伝統野菜「河内の赤かぶ
ら」でよく知られている静かな山里で
す。平安末期の長承2年(1133)
の記録「醍醐寺新要録」に、参議藤原
成道の荘園として小山庄の「河内」の
地名が見られます。

じじぐれ祭りは毎年5月5日に、氏
神の住吉神社で行われる古式にのっ
とった恒例の春祭りです。またの名を「青



神輿渡御の神事

山祭り」「かあかあ祭り」「椿祭り」に
んにく祭り」「千代千代祭り」とも別
称されて、今に伝えられてきました。
地元の伝承によると、部子山(14
65メートル)を望む上比丘尼地籍
の「神の森」から、氏神の住吉三神
(底筒男命・中筒男命・表筒男命)の
分霊を鎮座地の宮の小谷(下比丘尼地
籍)に勧請する際に、当時適当な神輿
が無かったため、芽吹き始めたブナや
シデの枝で葺いた柴神輿に分霊を乗せ
て創建された社殿に神を迎えたと言っ
た故事に基づいています。旧社地にはか
つては山の神が祭られ、サギツチヨ祭
りが行われていました。

柴神輿の製作

当日の午前6時に氏子が集合し、住
吉神社の鳥居前で作業の割り当ての後、
山中から伐りだしてきたブナやシデ、
ネソ(マンサク)の若枝を台座にグン
ドフジ(山ブドウ)のつるで固く結束
して柴神輿を作成(以前は大人と子供
の大小2基)。15年以前はまだ子供た
ちも多くいて、少し小ぶりの子供神輿
も作られました。少子高齢化の影響
で子供が少なくなり現在は大人の神輿
のみ。しかも、子供が銘々に持つつ
じやシャガなどの春の花を飾った50セ
ンチほどの棒状の「簾神輿」も作られ

樺の巨樹の鳥居木

神輿に同行して祭りをにぎやかに盛り
上げる役目もありました。大人用の神
輿は約120貫(450キログラム)
ぐらいの重さがあります。



鳥居木の間を抜けて村通りへ

午後一時より昇き子の若衆や氏子た
ちが拝殿に集合して神輿渡御の神事が
はじまり、いよいよ神輿渡御となりま
す。太鼓を合図にまず拝殿内で「千代
千代千代の 花の都のこめて 山それ
そはそはそはの(そわか)」と神歌
を歌って三周後、必ず参道にある樺の
巨樹の鳥居木の間を抜け、村通りを威
勢よく担いで回ります。



柴神輿を担いで回る



御神体の争奪の広場

彦保存会元
会長)との
こと。とも
あれ、じじ
ぐれ祭りに
は日本の祭
りの原初的
な人たちが
よく伝わっ
ています。

にぎやかに旧家の前庭で一服したり、
祝事のあった家で氣勢を上げたりしな
がら集落を一周して、鳥居木を通って
神社に戻り社殿下の広場の中央に柴神
輿を安置。広場には余興の演奏が行わ
れ、臨時の食べ物屋も開店し人だかり
で賑わい、祭り気分の最高潮の中でい
よいよ三座の神の依り代とされた御神
体のナカセンを引き抜いて奪い合う神
事が行われます。神輿の台座にシャガ
や辛夷、椿・ヤマブキなどの野の花を
結わえた30センチほどの杭状の棒が固
く結束されており、威勢のいい青年た
ちが柴神輿の中にいっせいに飛び込ん
で3本の御神体を競って引き抜き、拍
手喝さいの中で勝ち名乗りを上げます。
かつては拝殿の中で最終の神事が行わ
れ、柴神輿は階段を突き落されて解体
され、9月15日の秋祭りの宵宮に焼却
されていました。

若狭の食彩(三)

麴の食文化

麴は、米などの穀物にコウジカビがついたもので、発酵食品の元となるものです。以前は、家で麴の種菌を購入し、部屋を締め切って作っていた家もあったそうで、より身近な食材でした。近年は「塩麴」が流行し、積極的にとりた食材として人気を集めました。嶺南では、麴が注目されるずっと以前から、冬に欠かせない麴を使った料理が、生活に根付いています。

にしんのすし

「にしんのすし」「にしんずし」「にしんだいこん」などと呼ばれるにしんの麴漬けは、冬を代表する嶺南の味です。作り方は、米のとぎ汁などに一晩つけた身欠きニシンと塩漬けにした大根、麴、調味料などを入れ、約二週間漬け込み出来上がります。

多くの場合、十二月頃に作り、正月のご馳走として食べられてきました。例外として、敦賀市では「にしんずし」と呼び、正月以外に秋の敦賀まつりの際、ナスやキュウリなどを入れて作ります。

また、用いられる北海道産のにしんは、かつて、北前船の寄港地であった小浜や敦賀では、入手しやすい食材で

した。こうしたにしんと野菜、麴などで作る漬物は各地にあり、北海道では「にしん漬け」という、にしんと大根やキャベツ、人参などの野菜と麴で漬けた料理があります。さらに、東北や福井県大野市など奥越、石川県などでも多く作られています。にしんの麴漬けは、広く愛される冬の味です。



にしんのすし

さばのなれずし

以前に比べ、作る家は減少したようですが、内外海半島などで作られてき



さばのなれずし

ました。鯖の巾着漁法で、かつて大量に鯖がとれた小浜市田島区では、今でも正月や祭り、法事、来客時のご馳走のひとつとして食べられています。

保存食のへしこは、半年以上夏を越して作ります。なれずしは、このへしこをけだしをして麴と飯で漬けて作るので、時間も手間もかかるといえます。報告書（胡桃沢勘司「鯖街道の始点」『民俗文化第七号』近畿大学民俗学研究所 平成七年）などによると、かつて田島から上中町などへ、魚の行商をしていた時には、得意先の贈答品としても用いられていたようです。

田島の方によると、以前は麴を入れず飯のみで漬けていたもので、すっぱかったそうですが、今は味覚の変化もあり、麴を多く入れ甘く仕上げているそうです。近年では県外からも注文が多い人気の一品です。

赤唐辛子の麴漬け

小浜市国富地区では、麴と赤ピーマン、身欠きニシンで作った、赤唐辛子の麴漬けが食べられています。

八月末頃から九月頃、ピーマンを完熟させ、赤色になると収穫し、一センチ程度に切り、塩漬けにしておきます。にしんは、米の研ぎ汁または酒に一晩つけておき、麴、砂糖、醤油などを加え漬けます。冷暗所において、二十日程ねかせると完成し、一冬かけて食べる保存食です。



赤唐辛子の麴漬け

県外出身の私でも、夏場にふと、これらの料理が食べたくなり、冬が恋しくなることがあります。大変美味しく体にも嬉しい麴の料理は、先人たちの知恵が詰まった、ふるさとの味です。

(御食国若狭おばま食文化館

学芸員 一矢典子)



朝陽蟻軍金銀搬入図 一幅

鈴木松年筆

ほぼ中央に描かれた朝日を背景に、小高く盛り上がった地面の片隅にある巣穴に向かい、長蛇の列の蟻が砂金を運んでいるという、たいへん奇抜な構図です。

地面の表現に見える琳派風の「たらしこみ技法」による色彩の諧調が、緑青の清々しい小竹の群生を強調し、細密に描かれた様々な姿態の蟻達の、リズムミカルな動きも想像させます。

大きく描かれた朝日と、蟻達が運ぶ黄金から、本図はお祝いの日の掛軸であろうと容易に推測できますが、一方で金をお家に運ぶ、つまり、富を蓄える尊さを説いているとも考えられます。あるいはかなり穿った見方ではありますが、社会的な集団をつくり、その役割に応じて「働きアリ」、「兵隊アリ」、「女王アリ」などがあるアリ社会を、人間の社会に見立て、あくせく働き、食べられるわけでもない砂粒程度の金を蓄えることに夢中な、愚かな我々を皮肉っている様にも見えないでしょうか。

奇抜な構図ですが、だからこ

そ見る人の立場や考え方によって、様々な解釈や想像が出来る面白い図です。

作者の鈴木松年は、円山派の鈴木百年の子として京都に生まれ、初号は百億ひゃくえんのちに松年に改めました。豪放磊落な性格として知られ、作風も雄渾な筆致で描かれたものが多いのですが、本図は非常に丹念に描かれ、その技術の高さを遺憾なく発揮しています。

実は松年は敦賀と縁が深く、明治九年（一八七六）から十年にかけて当地に滞在し、敦賀の旦那衆に画の手ほどきをした外、たった一日で千枚の絵を描く「千枚書き」なる豪快なパフォーマンスを永賞寺で行い、敦賀の人達を驚嘆せしめたと言われます。

□ 絹本着色

□ 縦68.2cm 横99.5cm

□ 近代

□ 落款 鈴木松年筆

□ 印章 「松年」 白文分銅形印

（敦賀市立博物館 学芸員

坂東佳子）

「水戸天狗党敦賀関係史料」刊行

若狭路文化研究会

若狭路文化研究会（金田久璋会長）は、（公財）げんでんふれあい福井財団と共同で、若狭路文化叢書第十二集「水戸天狗党敦賀関係史料」を刊行しました。1864年（元治元年）、水戸天狗党は尊王攘夷を掲げて蜂起、朝廷にその心情を訴えようと京都を目指したが、敦賀で降伏、幕府に処刑されました。150年が経過する節目の年に当たり、敦賀における水戸天狗党の基本史料を後世に伝えようと出版しました。

敦賀私立郷土博物館が所蔵する敦賀奉行所の記録や日記、小浜市立図書館所蔵の「酒井家編年史料稿本」、金沢市立玉川図書館近世史料館が所蔵する加賀藩士の記録「南越陣記」などを掲載したほか、



水戸天狗党敦賀関係史料

福井県に残る主な水戸天狗党関係史料一覧と解題を付してあります。幕末の一大事件を伝える貴重な歴史資料として、今後の調査研究に大いに活用されることが期待されます。

文化講演会「育みはぐくまれ～命の大切さをもう一度～」

講師 木村まさ子さん（ことのは語り）

平成26年7月13日（日）県生活学習館において、福井県連合婦人会と共催で文化講演会を開催、本県をはじめ富山、石川、愛知、岐阜各県の婦人会・女性の会員ら約600名が参加しました。

講師の木村まささんは、心と体にやさしい料理を提供するレストラン経営の体験から、命をいただくことを意識して食べることがいかに大切かを伝えておられます。

●「いただきます」は、命をいただくということ。人は土、太陽、雨など自然が育てたものをおすそわけしてもらっている。だから、自然、地球、宇宙に感謝、いただける元気な私にも感謝しよう。

●自分を褒めることが大切。自分への信頼、自信、やる気につながる。毎朝、鏡を見て自分に笑顔をプレゼントしよう。そして自分を褒めよう。自分を大



講演の木村さん

切にすることで人も大切にできる。「私」という命のかけがえのないものを感じることが大切。

あたたかいお話ありがとうございました。

編集後記

- 新年あけましておめでとうございます。未（ひつじ）年。群れなす羊は、家族が安泰でいつまでも平和に暮らすことを表しているそうです。いい年になりますように。
- 昨年9月に田中完一氏が急逝されました。敦賀市文化協会会長として、大変お世話になっておりました。前号では、敦賀の鉄道文化について意欲的なエッセイを書いていただいたばかりです。ご冥福をお祈りします。
- 国内外で活躍中の本県出身ピアニスト今川裕代さん。お忙しい中にもかかわらず、すてきなエッセイをありがとうございました。3月14日に若狭町のパレオ若狭で今川裕代さんのコンサートが開催されます。皆さん、ぜひお楽しみください。
- ふるさと福井人物シリーズ。ホトトギス同人山岸世詩明氏による三国出身の俳人「森田愛子」です。41号、42号の「伊藤柏翠」の続編としてお読みいただければと思います。
- 来年度の財団助成事業を募集します。厳しい財政事情ですが、できる限り皆様のご要望にお応えしたいと思います。
- 次号は7月に発刊の予定です。ご意見、ご要望をお聞かせください。

本誌へのご意見・ご要望

第47号（平成26年7月発行）のご愛読者アンケートから

- ・ 言い尽くされていると思われる福井のあれこれをいろいろな切り口で記事にしてあり、楽しく読んでいます。
- ・ 地域の文化活動の紹介を続けてほしい。
- ・ 壬生狂言が京都だけでないことにビックリ。是非今度見てみたいです。
- ・ 食文化にたいへん興味があり、紹介していただいたレシピで作ってみたいです。

ご意見、ご要望ありがとうございました。これからも本誌の充実に努めてまいります。ご支援、ご協力をお願いします。

平成27年度 財団助成事業の募集について

財団では、平成27年度において文化活動等の事業を行うため助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

- 1 福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2 構成員（会員）が原則として20名以上の団体
- 3 平成27年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
- 4 営利を目的とせず、明確な会計処理を実施、報告できる団体
- 5 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成27年4月20日（月）まで（申請事業の実施が4月～6月の場合は、3月20日（金）まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等があります。詳しいことは「げんでんふれあい福井財団（☎0770-21-0291）」にお問合せください。

財団イベント INFORMATION

イベント名	内 容	期 日	場 所	入場料・その他
文化講演会	＜講師＞ 住田 裕子氏 ＜演題＞ 「変わりゆく社会の 中で、守りたい いのちと心」	平成27年 2月8日(日) 午後1時～	小浜市文化会館	小浜市連合婦人会と 財団の共催 入場無料
ピアノの名曲をあなたと ～今川裕代さんと ともに創る コンサート～	今川 裕代	平成27年 3月14日(土) 午後6時～	若狭町 パレア若狭音楽ホール	パレア若狭主催 財団協賛 (全席指定) 一般1,500円 学生 500円
平成26年度 福井県新人演奏会	公開オーディション	平成27年 2月22日(日) 午前11時～(予定)	福井県立音楽堂小ホール	福井県文化振興事業団主催 財団協賛 ＜公開オーディション＞ 入場無料
	新人演奏会	平成27年 3月22日(日) 午後1時～		＜新人演奏会＞ 全席自由 500円